

Upton, C. (2008). *Social Capital, Collective Action and Group Formation: Developmental Trajectories in Post-Socialist Mongolia*. Human Ecology, 36, pp.175-188.

WCS (2024). Dzud's Devastating Impact: How Mongolia's Wildlife Struggles in Extreme Winters. Available at: <https://mongolia.wcs.org/About-Us/News/articleType/ArticleView/articleId/22736/Dzuds-Devastating-Impact-How-Mongolias-Wildlife-Struggles-in-Extreme-Winters.aspx>

持続可能な開発に向けた革新としての「後退」：「モンゴルの牧畜」の事例(要旨)

モンゴル国自然環境・気候変動省(MECC)・国家気象環境モニタリング庁(NAMEM) 気象・水文・環境情報研究所
科学顧問 **ザンバ・バトジャルガル**

要 旨

伝統的な遊牧慣習と現代の技術・政策の統合は、今日の環境的および経済的課題に対する革新的な解決策となり得る。

本稿では、モンゴルにおける遊牧畜産の原理が、土地の劣化、気候変動、農村開発といった類似の課題に直面する地域において、より広範なグローバルな持続可能性の取り組みにどのように応用できるかを検討する。

遊牧畜産は土地との深いつながりを通じて、生態学的均衡、適応的な管理、そしてコミュニティ主導のガバナンスのモデルを提示しており、これは世界のさまざまな文脈に適用可能である。

加えて、本稿は、伝統的な生態知識の価値を認識し、それを現代の土地管理に取り入れることを支援する政策や研究のさらなる推進を提言する。

このような取り組みにより、遊牧社会が過酷な環境の中で生き抜いてきた適応力とレジリエンスから世界が学ぶことができる。

結論として、「放牧地と牧畜家の国際年(IYRP)」は、こうした伝統的実践を称え、それを持続可能な開発に向けた現代的な解決策と統合するための重要な機会を提供している。

本稿は、伝統と現代のアプローチが調和して機能し、牧畜民コミュニティの生計と彼らが依存する生態系を支える未来の可能性を強調するものである。

キーワード: 牧畜、過去の教訓、未来のパラダイム、振り返り、相乗効果、課題を機会へ転換